

一切善悪の凡夫人、如来の弘誓願を聞信すれば、仏、廣大勝解の者と言えり。

(『正信偈』聖典二〇五頁)

真の願いに目覚めよう

第4組 大願寺住職

北 秀継

text by Hidetugu Kita

私の次男がハワイ開教監督部赴任というご縁もあって、“真の願いに目覚めよう”のテーマのもと、ハワイ別院の宗祖親鸞聖人 750 回御遠忌法要兼創立 100 周年記念法要に坊守と共に御参りさせて頂いた。次期門首後継者大谷暢裕御夫妻や里雄康意宗務総長をはじめ、多くの来賓をお迎えしての法要であった。

大谷派のハワイ開教は、1899 年、山田見龍師がカウアイ島で布教を始め、1916 年、ホノルル市に仮別院が建立されたことが起源とされる。ご門徒（メンバーと称している）の多くは日本からの移民で、コーヒーや砂糖農場で働き、過酷な労働を強いられていた。また、第二次世界大戦では、強制収容所へ抑留されることにもなった。苦難の中、別院は心の拠り所とされ、移民達は、お念仏を申して歩んでこられた。

現在の別院では、日本語を話せる二世が少なくなり、英語世代である三世・四世、そして非日系人が中心に活躍している。法話もすべて英語でなされている。しかし、世代交代がうまく進んでいないのも事実のようだ。

30 年ほど前、少しだけ別院のお手伝いをしていた坊守が、今回の御遠忌の参詣者の数が、昔と比べて少なくなってきたと、ボソッと呟いていた。ある開教使にそのところを聞いてみた。仏教を、英語で説く難しさの他にも、問題があることが分かった。

一世が無理矢理二世を寺院に連れてきた。二世は、教えは分からなくとも、何とか寺院と縁を結んだ。しかし、多くの二世は、三世には同じことをさせた

くない。三世達には、自分自身で宗教の縁を結ぶことを選択させた。それで、多くの日系人は、寺院から離れていったと言う。

次男にこのことを言うと、自坊だって同じでしょうと言われ、ドキッとした。北海道も、明治・大正・昭和初期に本州（内地と呼んだ）から多くの移住者が入植し、団結して冬の厳しい寒さを乗り越えて歩いてこられた。お寺が精神的支えとなってきた。そのような多くの寺院が、今 100 年を迎えている。開拓時代は、入植者も寺院も貧しかったが、心の交流はなされていた。そして、お寺の参詣も多かった。

時代と共に生活が豊かになったが、お寺に来る人は少なくなり、参詣に訪れるのはご高齢の方ばかりである。私も気づいていたが、自坊の報恩講に帰ってきた次男の目にも、報恩講の参詣の激減が気になっていたのだ。

住職の姿勢が問われている。

「あなたは、本当にお念仏に出遇っていますか？」

「阿弥陀仏の声を聞いていますか？」

私に聞こえてくるのは、仏に背き続けている私がいるという声だけである。

「汝はこれ凡夫なり。心想羸劣にして未だ天眼を得ず」（聖典九五頁）の如来金言が胸に突き刺さる。しかし、このことこそが宝なのだ。

言い当てられた如来の「絶対無限に乗托す」（絶対他力の大道・清澤満之）しかないのである。このことを、素直に話し合いながら、御門徒とともに、歩んで行かなければならない。

まだ若き日の私が、大学を去り自坊に帰る時のこと。先行きの不安を口にすると、大谷大学の恩師の故櫻部建師はこう仰った。

「毎日お朝事を勤めなさい、聖典を繰り読みなさい。お念仏を申しなさい。不思議にも、必ず仏の声が聞こえてくる」

この言葉が、今でも鮮やかに蘇ってくる。色々悩み苦しみながら生活の中で、念仏申す姿を、実践していきたい。